

アイドルの恋愛事情

勇氣 雪



「ああ、今日も嵐の櫻井翔ちゃんカッコいいな。ボクもいつか嵐の櫻井翔ちゃんみたいなキレイな男性アイドルになりたい。」

ボク、小早川葵。実は自分のことボクっていうけど女の子で男性アイドルグループに憧れているんだ。そんなボクの眩きを聞いた康絃兄さんは「何を言っているんだ、葵は。葵は葵のままでもいいし葵は葵なりのハンサムウーマンになればいいじゃないか。」

と言う康絃兄さんに対して、つらら姉さんは「大丈夫、葵ちゃんならきつと誰にも負けないステキな男性アイドルになれると思うよ。お姉ちゃんはそう信じているよ。」と応援してくれるのだった。

ところが、ボクが中学生になったある日、つらら姉さんは重い病気になってしまった。男子用のズボンの制服ではなく女子用のスカートの制服を着て辛い女性の日が近づくときボクはついでに優しくしてくれたつらら姉さんにあたってしまった。「いいな、つらら姉さんは重い病気にかかって。ボクもこんなスカートの制服や女性の日が来るなら一層姉さんみたくなりたかったな。」と言ってしまった。

そんな自分に対してつらら姉さんは「ごめんね。葵ちゃん。でもお姉ちゃん約束するよ。きつと葵ちゃんを男性アイドルにならせてあげるからね。」と言うと、つらら姉さんは重い病気なのに

もかわらず毎日仏壇で、「どうか、私の妹の葵が男性アイドルになれますように。」と祈ってくれた。そんなある日つらら姉さんの夢の中に仏様が現れた。

「そんなに葵が心配ならお前が亡くなる前に葵の手を握るがよい。そうしたら、葵の体が変わるだろう。冷風を浴びたら男になり温風を浴びたら元の女に戻る。そして葵を男性にさせて街を歩かせるがよい。そうしたら男性アイドルの会社の社長に声をかけられて葵は男性アイドルになるだろう。」と言って消えた。

翌日、つらら姉さんはボクを呼んだ。そして仏様のお告げを伝えた。「葵ちゃん、お姉ちゃん天国から見守っているよ。ステキな男性アイドルになってね。」そしてつらら姉さんはまもなく息をひきとった。「つらら姉さん……。」この時ボクは改めてつらら姉さんの優しさを感じた。「酷いことを言っでごめんさい。つらら姉さん。」と後悔して心の中で謝った。

それから、一年が過ぎた。その年の夏のことだった。エアコンをポーッと見ているとつらら姉さんの言っていたことを思い出した。「エアコンか。そうだ！つらら姉さんが言っていた冷房を浴びたら男になるか試してみよう。」

そういうとボクは冷房を入れてみた。すると声が変わって、胸も平らになっていた。鏡で自分の姿を映すと、なんとそこにはキレイなステキな男性がいた。茶髪で眉がキリツとしていて声は

ワイルドで目もきれいになっていた。

「な、なんて美しいんだろう。姉さんボク、本当にこういう男性アイドルになりたんだ。でも本当にそういう男性になるなんて思いもしなかったぜ。」と自分の心の中でつぶやいていた。

そして、内緒で康絃兄さんのメンズ用の服を着て街を歩いてみた。

「キヤー、あの子カッコいい。」

「手降って。」

等と女性が声をかけてきた。ボクもそれに答えた。すると、女性も男性が好きな男性もみんな僕にキュンキュンしていた。

ボクは嬉しくなり心の中で姉がいる空に向かって

「まるで、ボクが男性になっていてるなんて夢見ているみたいだ。今まで女でいたことが嘘みたいだ。これで男性アイドル会社の社長に声なんかかけられたらもう本当に生きていてよかったと思う。」と呟いていた。

すると、「ねえ、その君。」

と誰かがボクの肩をつかんでいたの振り返って見たらそこには長身で眼鏡をかけていて金髪の男性がいた。

「何でしょうか？」

「君ステキだね。私こういうものだけだ。」

と、その男性はボクに名刺を渡した。なんとそこには、男性アイドル会社 社長土井って書いてあった。ボクは嬉しくて親にも秘密にして男性アイドルとして働くことにした。さっそく、社長とタクシーに乗って男性アイドル会社に着いて中に入るとそこには美しい男性たちがダンスをしたり歌を歌ったりしてコンサートの会議を開いた。

そして、社長に連れられて風って書いてある楽屋に通された。

「潤くん、ちょっといいかな？」

とそこにいたのは嵐の松本潤にそっくりで、顔が濃いステキな男性だった。

「紹介するよ、君のパートナーの……」

「初めまして、小早川葵です。」

「君が葵くんか。話は社長から聞いているよ。男性アイドルに憧れているんだってね。」

ボクは、松野潤よろしくね。」

「よろしく願います。」

とボクと潤は握手をした。そしてこれがボクの後のフィアンセ潤との最初の出会いだった。

しかも、ボクが女性ってことがばれるなんてこの時は思わなかった。

そして今日からボクと潤との厳しいレッスンが始まった。

つらら姉さんが生きていたころカラオケでレッスンをしていたおかげで潤からも社長からも褒められた。

「葵、すごいよ。初めてなのにこんなに歌とダンスが上手だなんて。」

「ありがとう、社長。潤。」

「今度コンサートやるんだけど葵も出演することになったよ。」と社長から告げられた。

「本当ですか？」

「一緒に頑張ろうぜ。」と潤。

「はいっ。」

こうしてボクはコンサートに出演することになり潤の励ましのおかげで一生懸命歌とダンスを踊った。

そして、コンサート本番。沢山の観客たちの中で踊るボクと潤。さすがは潤、何回もコンサートに出演しているのかあがつたりはしていなかった。ボクは少しあがつてしまった。

コンサートはどんどん進み今度は透明の服を着せられて歌を歌っていると会場の空調から温風が出てきた。そして声のトーンが女性になり胸も大きく見えてなんと男性から女性に戻ってしまった。

幸いのに観客たちにはばれずに済んだ。けれども、コンサートが終わり社長と潤に呼ばれた。社長室に入ると

「葵くん、君ってまさか女性だったの？」

「・・・、はいっ。」

「どうして今まで黙っていたんだ？」

ボクはたくさん涙をこらえていたがとうとう流してしまった。

「社長、潤。ごめんさい。ボク、いいえ葵は男じゃないの。女なの。本当は……」

でも、どうしても男性アイドルグループに入りたかったのです。そして、亡き姉の魔法で葵が男と女になれる体質になったのです。別に二人を騙すつもりはなかったんです。ただ、女だっということがバレるともうここにいられませんよね。社長、潤、今まで楽しかったよ。ありがとう。ボクは男性アイドルになれて幸せでした。さよなら……」

ボクは、潤と社長に別れを告げた。その時、潤が社長に

「社長、どうか葵を風に入れさせてください。ボクどうやら葵を気に入った。

だからこれからもずっと葵のそばにいたい。」

「……、潤。」

社長少し考えてから

「わかった、じゃあこうしよう。潤のフィアンセになるのなら風のメンバーに入れさせよう。

潤もいいな。」

「はいっ、ボクはいいですけど。葵は？」

その時ボクは嬉しかった。男性アイドルでいられる。しかも、大好きな潤と一緒にいられるのだ。ついうれし泣きをしてしまった。すると潤が眉を下げた。

「なんだ、イヤなのか？」

「違うの、ただ嬉しくて。だってまた優しい潤と一緒にいられる。しかもまた憧れの男性アイドルグループに入れるだなんて。」と喜んでいるボクの涙を潤は優しく手を差し伸べた。

「葵、これからも一緒にいようね。」なんとそれはプロポーズみたいな言葉だった。

「はいっ、潤。」とボクと潤はお互いの手を握った。

社長もそんなボクたちの様子を見て頷いた。

こうしてボクは潤とのフィアンセになり憧れの男性アイドルになった。

そして、社長室の窓から天国の姉のような優しい風が吹いているのを感じた。





付録：作者へのインタビュー

Q 「この物語を、どんなきっかけで描こうと思いましたか？」

A 「自分が、ジャーナリズムに憧れていたからです。」

Q 「どんな人にこの小説を読んで欲しいですか？」

A 「特に、LGBTの人に読んでもらいたい。」

Q 「これからの夢を教えてください。」

A 「いつか本を出したい。」

そして、声優を使ってドラマCDを出したい。」

Q 「このお話も、続きが気になります。是非、続編を書いて下さい。」

A 「はい、頑張りたいと思います。」